



いつもの朝、いつもの道を。

札幌市立伏見小学校 5年 前田 海音

今年一年生になったお隣のハナちゃんと一緒に登校できる日を私はずっと楽しみにしていた。ハナちゃんの歩幅に合わせてゆっくり歩くと、私一人の時には気付かない段差や車のスピード、季節の移り変わりなど危険にも楽しみにも敏感になる。ハナちゃんは道すがら虫を見つけて驚いたり、大きな水たまりでたじろいだりする。十五分程で到着する学校までの道のりがハナちゃんには大冒険だ。私も一年生の頃はそうだったのかな、と四年前を思い出す。私はハナちゃんの姿を通して、過去の自分が歩いた道のりを振り返り、今の自分を確認している。かけがえない時間だ。

私が体調を崩したり、通院や入院で学校を休む時、一人で学校に向かうハナちゃんの後姿を想像するとたまらない。雨が降りそうだな、信号を渡りきれているかな、心細くなっているのかな、など。コロナ禍で学校生活は大きく変化して、一年生にはぎやかな給食時間も、校歌を高学年に教えてもらい合唱する事も、歓声が響き渡る運動会も知らない。沢山の我慢や不安をマスクの下に押し込めた一年生を思い、それでも学校は楽しい場所だよと伝えたくて言葉に悩む。そして今日も手を消毒して、学校までの道のりを手をつないで一緒に歩く。ハナちゃん

は私の気持ちなどお見通しのようにで、

「ハナ学校大好き！先生や友達と会えれば楽しいもん！」

と笑顔で言った。不安に振り回されて気持ちを先回りしすぎる私より、生活に制限があっても、当たり前が変わっても、今を楽しんでいるハナちゃんは強いな、と尊敬した。今は小さなハナちゃんも数年後にはもつと小さな誰かと手をつないで同じ道を歩くのだろう。そして誰かの気持ちを想像したり自分を振り返ったりするのか。「道」には心構えや物事のあり方という意味があると知った。沢山の人々が、「道」を歩き、それぞれに引き継がれる思いがあるとしたら、世界が変わり続けても私達は笑顔でいられる、そんな気がする。

（審査評）小学五年生の作者は、毎朝、一年生のハナちゃんといっしょに登校している。まだ幼いハナちゃんは、道すがら、出会った虫に驚き、大きな水たまりにたじろぐ。また、作者が病気で学校を休んだときは、一人で学校に行くハナちゃんのことや心配でたまらなくなる。作者とハナちゃんの、互いが互いに寄せる思いが微細に綴られ、二人が歩く姿が目に見えよう。小学五年生とは思えない鋭い観察眼で見た世界と、新入生のハナちゃんと歩く二人のほほえましい姿の描写が二重写しになった、見事な出来栄の作品である。

佐藤典司